

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K03179

研究課題名(和文) 6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究 - 奈良盆地を中心に -

研究課題名(英文) An empirical study of "Bemin system" from viewpoint of the production of Haniwa in 6th century

研究代表者

廣瀬 覚 (HIROSE, Satoru)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：30443576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：律令国家成立以前の全国的な支配制度である「部民制」について、6世紀代の埴輪生産の展開を詳しく跡付ける作業からその実像を追究した。王権膝下である奈良盆地では、5世紀末に埴輪の生産拠点が各所に計画的に配置される。そこには他地域からも製作者が動員され、盆地内の消費を満たすべく大量生産と広域流通が展開した。こうした実態が王権への労役や貢納を課す「部民制」の成立に対応すると考えられるが、それは各地域から労働者を大量動員する3世紀以来の王陵の造営体制を淵源とする。そうした上番・帰郷型の動員体制を前史とし、様々な職種・労働からなる奉仕体制として当該期に制度化されたものが「部民制」の実態であると結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

6世紀の埴輪生産について、様式構造やその成立・変遷過程、系統分化の実態や伝播の背景に関する理解を従来よりも深化させることができた。また試験的に実施した三次元計測による埴輪の生産・流過程の分析成果は、おそらく同手法を用いた埴輪研究の最初の実践例となる。今後、同様の分析を展開することで、考古資料の生産・流過程に関する研究が大きく進展することが期待できる。

また「部民制」は従来、文献史学を中心に議論されてきたが、本研究では考古学の立場からその実像を深く追究することで新たな見解を引き出した。考古学と文献史学の整合的理解により、古代国家の成立過程をより鮮明に描き出していく道筋を示すことができた。

研究成果の概要(英文)："Bemin system" is the political system before ancient government formed in Japan, I investigated the real image of that through studying the developmental process of production of haniwa in 6th century. Production bases of Haniwa were set up systematically at the end of the 5th century in Nara Basin where the center of the Kingship of at that time. In order to cover the consumption in the basin, many workers were mobilized there from other areas, and mass production and wide area distribution expanded. It was thought that such actual situation corresponds to "Bemin system" imposing labor and tributing any products for the Kingship. But it derived from the Construction system of Royal Tombs since the 3rd century, mobilizing many workers from each area it mobilized a worker from each area. I concluded that "Bemin system" is the service system for Kingship to carry out various labors, that the central government enacted in 6th century based on that.

研究分野：日本考古学

キーワード：埴輪 生産 流通 王権 部民制

1. 研究開始当初の背景

古墳時代後期の開始期は、限定された墓域内に墳形と規模による序列表象をともなつて古墳を集約的に築く中期の階層秩序が解体し、かわつて各地で中小の前方後円墳が林立する新たな古墳秩序が形成される時期にあたる。埴輪生産もそれにともなつて大きく変質をとげ、上述のような階層構成型の古墳群を消費単位とする生産体制が瓦解し、各所に拠点的生産地を設置して埴輪を広域供給する体制が出現する。その背景にはかねてより、文献史学でいう「部民制」との関連が指摘されてきた。とりわけ、王権膝下たる奈良盆地や大阪平野では、こうした後期の埴輪生産体制の背景に、王権の葬送祭祀を司る「土師氏」とのかかわりが推測されてきた。

一方で、当該期の埴輪生産をめぐるのは、拠点を構えての恒常的な生産体制の出現により各地で地域色や系統性が表出することもあり、従前より生産集団やそれを管理する首長層の相対的な自立を見出す見解が支配的であった。こうした考古学的現象と全国的な支配体制とされる「部民制」との統合的な理解が課題とされてきたが、そもそもそうした文献史学との整合化を図る前に、研究開始当初には当該期の埴輪に対する基礎的な研究が十分深められていなかったといえる。とりわけ、古墳時代後期の王権中枢部では、埴輪の系統識別すら明確にされていないのが実態であり、このことがそうした王権による政治的支配の進展と埴輪生産との関係、ひいては当該期の古墳秩序の内実を実証的に議論する上での足枷になっていた。

2. 研究の目的

「部民制」は、律令国家以前の全国的な支配制度で、技術者を含む様々な職掌集団を「部」として掌握した上で、王権への労役や生産物の貢納を課す制度とされる。中央の「伴造」氏族が地方から出仕してくる集団を「部」として編成するのが基本構造であり、またその成立時期は5世紀後半から6世紀にかけてとされている。そうした「部民制」の実質的な成立時期が上述の中期から後期への埴輪生産体制の移行とおおよそ対応関係にあることが従来から指摘されてきた。ただし、その変化に対する王権の関与のあり方については様々な意見があり、定見が得られていない。本研究では、王権の膝下たる奈良盆地を中心に、埴輪の生産・流通体制をこれまででない精度で復元し、労働者や製品の動きを実証的に把握することで、「部民制」の実像を考古学的に解明することを目的とした。

古墳に樹立・配列される埴輪は、元来、飲食物供献や瘳邪といった古墳の葬送観念を具現化する象徴物であるが、その製作には一定の技術を要し、かつ大量に生産・消費されることから、古墳時代の手工業生産の実態解明において恰好の資料とされてきた。加えて埴輪の起源説話からは、土師氏の関与、および「土師連 - 土師部」の構造が見出されることから、埴輪生産の研究は絶えず「部民制」の内実を追究する試みとして展開してきたといっても過言ではない。しかしながら、従来の研究では、文献史学による成果を過度に意識するあまり、客観的な考古学的成果の蓄積にもとづく議論とはなりえていなかった嫌いがある。その結果、問題となる6世紀代の王権中枢部の埴輪の生産・流通に関しては、前述のように変遷や系統関係の整理といった基本的な情報の整理すら不十分であった点は否めない。

本研究ではそうした研究の現状を踏まえ、まず、後期の円筒埴輪、すなわち群円筒埴輪の内容をその成立過程にまでさかのぼって再検討し、中期から後期へ至る生産体制の変化、およびそれに付随する系統分化のあり方を奈良盆地の状況にもとづいて詳しく整理することを第一の目的にかかげた。その上で、古墳の築造状況や隣接地域との関係も踏まえながら、生産・供給体制や製品流通の実態、工人の労働編成や移動形態を追究することで、王権中枢部における後期の埴輪生産体制の特質を明らかにしたいと考えた。

3. 研究の方法

具体的には、：後期（群）円筒埴輪の成立・変遷過程の解明、：の成果を踏まえて奈良盆地内における後期埴輪の系統分化とその分布状況の整理、：を踏まえた生産・流通体制の検証、隣接地域間との工人移動の実態の把握、という手順で研究を遂行した。

については、突帯製作・底部調整の両製作技法の再検討を基軸に、中期（群）からの段階的な編成過程を細やかに跡付けることによって、後期の円筒埴輪製作の本質を追究した。については、課題であった王権中枢部における後期埴輪の系統識別を奈良盆地の円筒埴輪を主対象として追究し、部分的に形象埴輪との属性共有にも着目しながら、形象埴輪からも系統識別の補強を試みた。また系統分化に対して、円筒埴輪の段構成の多寡が系統分化とどのように相関するのか、あるいはしないのかについて、古墳の墳形・規模との関係を踏まえて検証することにした。

については、奈良盆地内での系統識別の結果を踏まえて、その隣接地域での分布状況やヘラ記号の共有状況を詳しく整理することで、工人移動の実態を、中央からの派遣モデル、地方からの上番・帰郷モデルのどちらでとらえるのが妥当であるのかを検証した。

またの生産・流通状況をよりより客観的に補足する試みとして、菅原東窯産と目される埴輪に対して三次元計測を実施し、三次元モデル画像を用いて工人ごとの作り癖やハケメパターンの共有状況を検証した。

4. 研究成果

後期(群)の円筒埴輪の成立過程に関しては、底部調整が顕在化し、かつ突帯製作において断続ナデによる貼り付けと板オサ工整形による突帯群が出現する段階を群の成立、すなわち期の開始と捉える案を提示した。中期の階層構成型古墳群の造営が停止し、それと表裏で各所に拠点的生産地が設置されていく現象とほぼ対応関係にあり、須恵器編年ではTK23型式期に相当する。従来から古墳時代後期の開始をめぐっては、TK23型式期(暦年代では5世紀後葉)とする意見と、MT15型式期(6世紀初頭)とする案が対立してきたが、古墳の築造動態、およびそれに呼応する埴輪生産の変質過程からは、前者の理解が妥当であることが示唆される。

その後の後期の埴輪編年については、底部調整における各種調整方式の確立と粗雑化、突帯

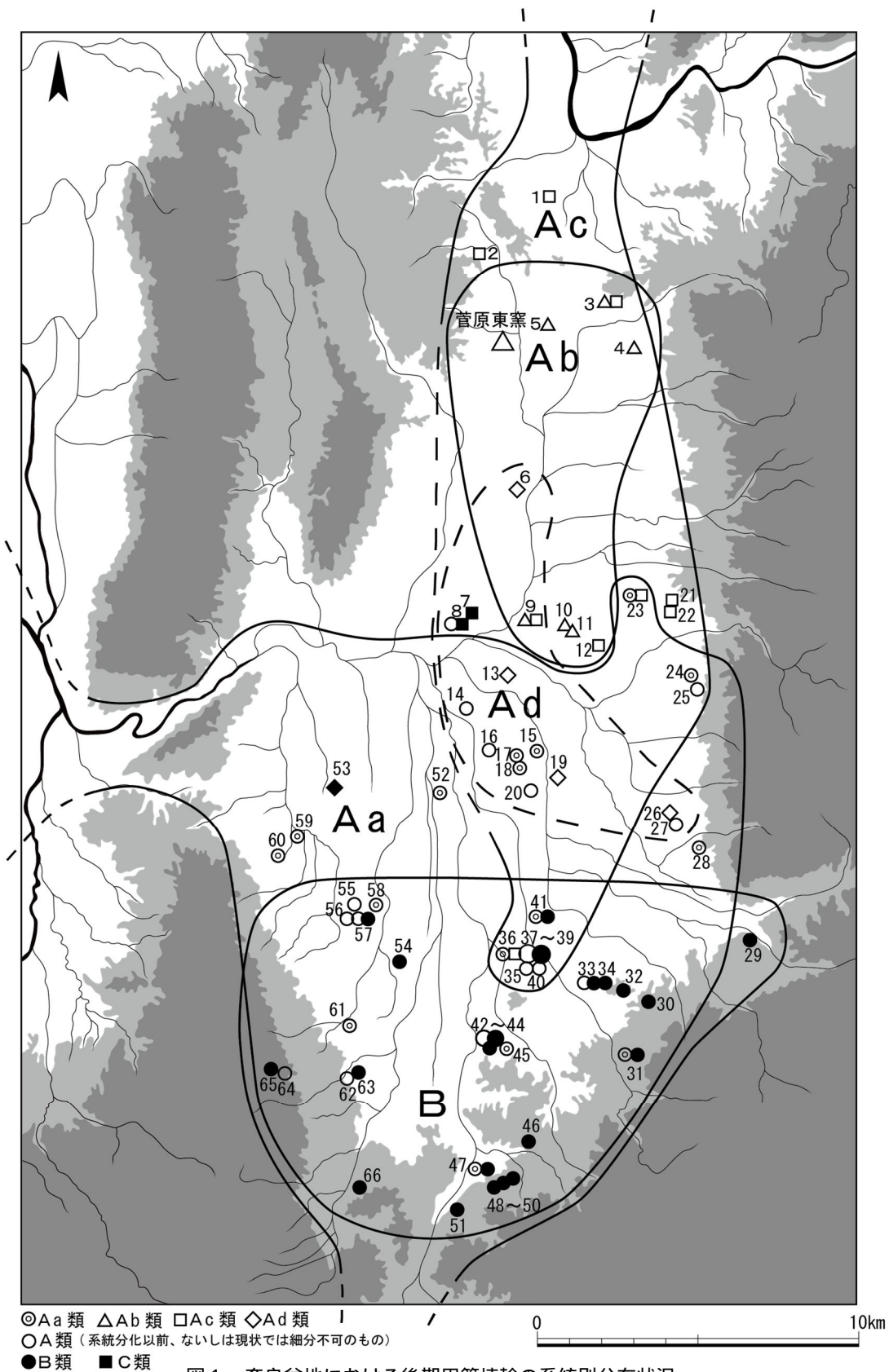


図1 奈良盆地における後期円筒埴輪の系統別分布状況

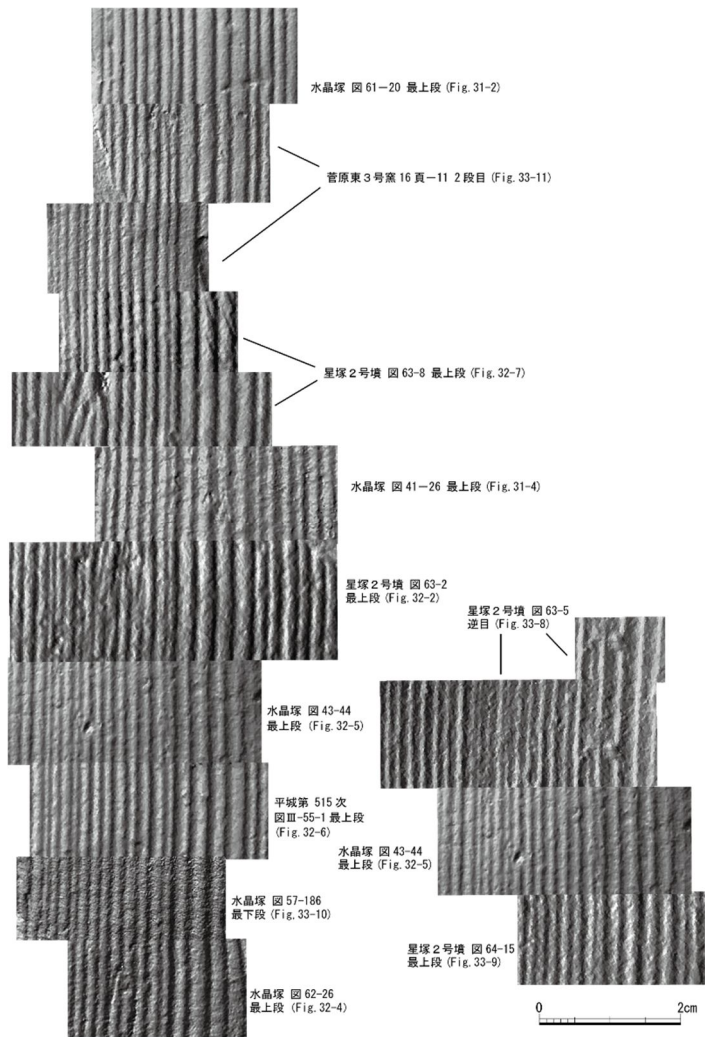


図2 菅原東窯産埴輪のハケメパターンの同定（三次元画像）

地が林立していく動きは、生産集団の自立化を意味するのではなく、王権の意思を踏まえた生産地の計画的配置の結果であり、あくまでも奈良盆地内の需要を満たすことを意図したものであったと理解される。

さらに奈良盆地の隣接地域に目を転じると、奈良盆地内で系統分化した各系統がそれぞれ隣接地域へも連なるように展開していることが判明する。加えて周辺地域の各古墳における埴輪の細部形態や胎土の相違からは、そうした分布圏の形成は奈良盆地からの製品供給や工人派遣によるものではなく、周辺地域から製作者が奈良盆地内の生産拠点に動員され、そこで生産に従事したのち、埴輪製作に関する情報を本貫地に持ち帰った結果と判断される。王権膝下たる古墳時代後期の奈良盆地では、擬制的なものも含む同族関係にもとづいて周辺地域から拠点的埴輪生産地に製作者を動員する体制が存在しており、それによって盆地内の埴輪の大量生産と消費が維持されていたことになる。こうしたあり方が、文献史学で議論されてきた「部民制」の実態に対応するものと考えられる。ただし、王権中枢への上番的な移動、とりわけ王陵造営への動員体制自体は、古墳時代開始当初から存在した蓋然性が高いことを踏まえると、5世紀後半に成立したとされる「部民制」は、基本的にはそうした旧来の上番・帰郷型の動員体制を踏襲しつつ、当該期に至って様々な職種・労働からなるより体系的な王権への奉仕体制として広域化・制度化されたものがその実像と推測される。

今後は、近年の埴輪研究において飛躍的に深化を遂げている同工品・生産組織分析を、王権中枢 - 周辺地域間で見出される同系統かつ酷似する埴輪群において精力的に実施することで、両者の工人編成の規模や質、構造の差異が明らかになり、ひいては工人の中央への出仕や地域への帰還、あるいは製品そのもの貢納といった、まさに「部民制」研究で想定されてきた実像に迫る成果が得られるものと期待される。出土量が豊富で、かつ生産地 - 消費地間の製品の同定や、製作者の労働編成のあり方を実証的に追究し得る埴輪研究は、考古学から「部民制」の実像を詳細に復元し得る唯一の手段といっても過言ではない。本研究では試験的導入にとどまったが、今後さらに三次元計測による分析等も駆使することで、埴輪の生産・流通体制の研究を一層深化させていきたいと考える。

群の整形・調整の省略過程、外面二次調整ヨコハケの施効率の低下などの諸要素の変化を指標に、古相・中相・新相の3段階の変遷過程として把握できることを指摘した。

以上の時間軸に依拠しつつ、主に奈良盆地の後期後半の状況にもとづいて、同地域の埴輪をA~D類の4系統に大別し、A類についてはさらに4系統に細別する案を提示した。これらは拠点となる生産地の差をある程度、反映したものと考えられるが、消費地では系統の異なる埴輪が同一古墳で共存する事例が頻繁に確認されることに加えて、同一古墳群、同一墓域においても異なる系統の埴輪が入り乱れるように流入する現象が普遍的に認められた。こうした状況は、当該期の奈良盆地では、古墳群単位で埴輪を生産・消費する段階を脱しており、消費地の受容に応じて生産拠点から多角的に埴輪が流通していたことを示しているものと考えられる(図1)。その点は、三次元計測を用いて実施した菅原東窯産埴輪の流通状況の検証作業からも裏付けられた(図2)。

注目すべきは、そうした生産地の複数拠点化や系統の林立する状況にも関わらず、古墳の形状・規模が示す階層差に対応して、円筒埴輪の段構成は一律に序列化されている状況が見出される点である。このことから、各所で生産

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 廣瀬 覚	4. 巻 -
2. 論文標題 昼飯大塚古墳の埴輪生産体制再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昼飯の丘に集う - 中井正幸さん還暦記念論集 -	6. 最初と最後の頁 153 - 162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 覚	4. 巻 -
2. 論文標題 畿内の埴輪 東国の埴輪	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 集まれぐんまのはにわたち 群馬県立歴史博物館第99回企画展	6. 最初と最後の頁 122 - 127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 覚・宇野隆志	4. 巻 -
2. 論文標題 妙見山古墳出土埴輪をめぐる諸問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 妙見山古墳1967年調査報告 平成30年度京都大学教育研究振興財団助成金研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 51 - 74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 覚	4. 巻 217
2. 論文標題 栄山江流域における円筒埴輪の展開過程	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 213 - 237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 覚	4. 巻 66-3
2. 論文標題 埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 考古学研究	6. 最初と最後の頁 36 - 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤正吾	4. 巻 2018
2. 論文標題 ウツナベ古墳造出周辺採集の埴輪	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要	6. 最初と最後の頁 48 - 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 覚	4. 巻
2. 論文標題 津門稲荷町遺跡と西摂地域の埴輪	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡 大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会合同シンポジウム	6. 最初と最後の頁 59 - 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 覚	4. 巻 -
2. 論文標題 明石川流域における埴輪の展開とその背景	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 第17回播磨考古学研究集会記録集	6. 最初と最後の頁 65 - 80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 廣瀬 覚
2. 発表標題 埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成
3. 学会等名 考古学研究会第65回総会研究集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬 覚
2. 発表標題 畿内からみた群馬の埴輪 - 埴輪が語る古代王権と地域間交流 -
3. 学会等名 群馬県立歴史博物館第99回企画展『集まれ群馬のはにわたち』連続講演会第1回（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬 覚
2. 発表標題 古墳時代前期の古墳群形成と埴輪
3. 学会等名 柏原市立歴史資料館令和元年度夏期企画展『歴史舞台玉手山古墳群』文化財講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬 覚
2. 発表標題 土師氏の故郷での埴輪生産
3. 学会等名 平成30年度奈良市埋蔵文化財調査センター夏期特別展「奈良市の埴輪」埋蔵文化財講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 廣瀬 寛
2. 発表標題 埴輪からみた佐紀古墳群
3. 学会等名 第33回藤井寺市文化財講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬 寛
2. 発表標題 古代王権と埴輪生産
3. 学会等名 今城塚古代歴史館「八二ワの日」記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 廣瀬 寛	4. 発行年 2021年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 80
3. 書名 6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	大澤 正吾 (OSAWA Syogo) (40710372)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員 (84604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	犬木 努 (INUKI Tsutomu) (40270417)	大阪大谷大学・文学部・教授 (34414)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関